

一心寺かわら版

第二十五号 平成二十四年三月発行

仏教講演会「東日本大震災の東北を訪ねて

― 悲しみに寄り添う ― を前に

今、この原稿を書いているのは平成二十四年三月十一日、東日本大震災から丸一年が立ったこととなります。新聞各紙・テレビで様々な特集が組まれました。被災地の震災直後と現在の写真が並べて掲載されていましたが、瓦礫が撤去されただけで何も残されていない、何もできていない復興には程遠い姿がありました。

どんなに辛いことでも時が立つと忘れてしまうのは人間の良いところでもあり、悪いところでもあると思います。四月二十日にまんこの町民文化ホールにて開催される仏教講演会「東日本大震災の東北を訪ねて、悲しみに寄り添う」を前に、今一度東日本大震災に苦しむ人々に寄り添っていくことができると願います。それはこの震災に限らず、すべての悲しむ人々へのあたたかい眼差しにつながると思います。



(震災直後と現在の写真)

震災直後からしばらくは、津波による建物敷地内への流入物の撤去清掃、避難所での炊き出しなど物資面での支援が中心でしたが、時が経つにつれ被災者の自立支援とともに、一人一人とのふれあいによりところに寄り添い、孤独死や自殺の防止にもつなげなければならぬと言われています。

当派僧侶にも被災地を訪れた方々がいます。昨年五月の当山大遠忌法要でも美しい雅楽と舞楽を披露していただいた和鳴会、彼らは二度にわたり被災者を慰問されました。私にも声を掛けていただきましたが法務の都合で参加することはできませんでした。

被災地を訪れた彼らに話を聞くと、追悼法要、雅楽の調べによって少しなりともところを癒すことができればという気持ちで訪れたのですが、場所によってはそのような雰囲気ではなかったし、被災者のためになったかといえれば分からない、自己満足であったかもしれないと語りました。

こころの支援ともいえるべき活動には何が大切なのでしょうか。



(和鳴会慰問演奏の様子)



(被災者の方々)

震災後に六〇〇人の被災者を受け入れた南三陸ホテル観洋の女将・阿部憲子さんは

「暗い話ばかりでしたが、震災直後は私たちのスタッフも被災した自宅に帰ってみて、写真が一枚もないとか言って戻ってくるんです。誰もお金があるとかないとかは言わないんです。位牌を見つけたと言って、喜んで帰ってくるんです。だから、何が一番大事なのか、家族の絆や人間同士の結びつきの大切さを、この地域の人は改めて考えることができました」と述懐しています。

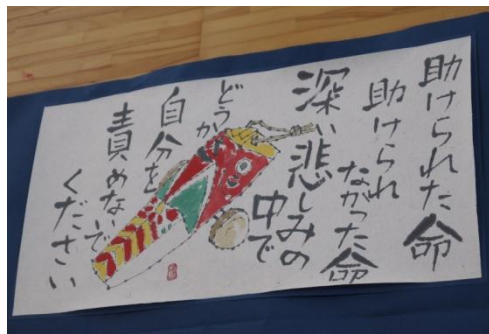
また、現地ボランティアの守屋宏司さんと北村孝之さんは

「僕の経験なんですけど、ボランティアにやって来て、「大満足です」と言って帰る人がいるんです。これが結構多いんですよ。それが例えば国体のボランティアなら、閉会式が終わったら、「やれやれ大満足」でいいんでしょうけどね。大満足されてしまうと、一度きりで来なくなるんです。「満足していない」とか、「何かやり残した気がする」という人は、必ずリピーターになってくれます。実際、ボランティアでいちばん大切なのはリピーターになることなんです。要は継続なんです。…(中略)…

生の声なんですけど、東京の花火が中止というニュースが流れたとき、それをテレビで見ていたお年寄りが、「私たちのために申し訳ない」と言うんです。ボランティアだってそうで、外部の人に対して申し訳ないという思いが強いですね。ありがとうの前に、申し訳ないと手を合わされるんです。だから炊き出しをしても、「ごめんなさい、申し訳ない」なんです。…(中略)…

自粛するかしないかなんて、本当にどっちでもいいんでしょう。でも、どちらにしても、東北のことを考えてくれているんだということは伝わっているはずなんです。我々のことを考えて自粛し

てくれているんだと思うでしょうし、我々のことを考えて自粛しないで経済を活性化させて、そうすることでお金を回してくれようとしているのだと思うでしょう。どちらにしても東北の人たちにとって、うれしいことなんです。」と語りました。



(避難所に掛けてあったことば)

被災者、ボランティア、様々な立場の方々の声を聞いていると、私に何ができるか、何をするかということよりも、相手のことをどれだけ思っているかということが大切であると感じます。

アメリカの医学者が、祈ってくれる人のいる患者と、いない患者の治癒力を調査したそうです。もちろん祈る人のいる患者の方が、治癒力が高いという結果が出ました。誰かが自分のことを気に掛けてくれていると思えば、心のありようが変わってくる、力が湧いてくるのでしょうか。

テレビCMで流れていた金子みすゞさんの詩が多く共感を呼んだそうです。

「遊ぼう」っていうと「遊ぼう」っていう。
「馬鹿」っていうと「馬鹿」っていう。
「もう遊ばない」っていうと「もう遊ばない」っていう。
そうして、あとでさみしくなって、
「ごめんね」っていうと「ごめんね」っていう。
こだまでしょうか、いいえ、誰でも。

童話作家・矢崎節夫氏は、

「こだまとは、「丸ごと受け入れる」ことです。かつて、私達のまわりにいてくれた、すてきな大人たちは、こだましてくれる人達でした。ころんで「痛い」といった時、両親は「痛いね」と、私の痛さを丸ごと受け入れてくれて、返してくれました。こだまは、「ヤッホー」といったら「ヤッホー」と半分の大きさになって返ってくるわけですから、「痛いね」と返してくれた時、私の痛さは半分になると解説されています。…」



私が誰かに共感したときに、そのころはこだまのように帰っていく。やさしさがやさしさを生み、どんどんと広がっていく。仏・菩薩には「他心通」(他のところを知る力)があると説かれます。また、お釈迦さまは「対機説法」(相手に応じて法を説く)、「応病与薬」(病に応じて薬を与える)をされたといわれます。

「他心通」、「対機説法」、「応病与薬」により相手に応じた慈悲を与えるとはではないかなくても、少しなりとも悲しむ人々のところに通じていくよう心掛けていきたいものです。

仏教が生んだことば③ 「不惜身命」 (ふしゃくしんみょう)



「不惜身命」、この言葉を聞いて記憶に残っている方も多いのではないでしょうか。貴乃花が横綱昇進した時の記者会見に披露したものです。貴乃花は「自分の身命を惜しまずなげうつこと」で横綱の職責を果たしたいという意思を言葉に託したものでしょう。

しかし、「不惜身命」とは、仏教の大切なキーワードで、菩薩が「生きとし生けるものを救済するため、自分の身命を惜しまずなげうつこと」が本来の意味です。私たちが執着する名誉欲、物欲などにとらわれることなく、すべてをあげて他者を救済することです。

横綱に執着することなく、骨身を惜しまず身命をなげうって力士道に精進しますと解釈しても、いささか現代風にアレンジしすぎて使われたかもしれません。

さて、本来の仏教の「不惜身命」の人を彷彿させる人として、浄土真宗本願寺派門主の子として生まれ、四十二歳で逝った九条武子(一八八七〜一九二八、右下写真)さんが思い出されます。彼女の詠んだ歌に薫る「やさしいところ」と「求道のところ」は今も新鮮さを失っておらず、歌人武子の名は永遠に消えることはないでしょう。

彼女は歌人であるとともに著名な社会事業家でもありました。築地本願寺で関東大震災に自らも罹災し、その体験を「もうあの後、かれこれ十日余にもなりますのに、夢を見ている様で、暑さも寒さも時候さへ何が何やらわかりませず、…全部焼きつくしま

したから」(『九条武子書簡集』)という言葉で綴っています。これを契機に罹災した子供たちへの救援活動に身を投じていく姿は、菩薩行そのものでありました。彼女の呼びかけによって多くの救援物資が集まり、また、罹災地の救援医療から「あそか病院」、児童養護施設「六華園」が創設されました。その後彼女は、十年の歳月を待たずに逝ってしまいました。

大災害で自らが罹災しながら救援活動に身を投じ、骨身を惜しまない救援活動をする方々にこそ、「不惜身命」と菩薩行という言葉が贈られるべきでしょう。大震災が菩薩を必要とするのは、そこに未曾有の悲しみとつらさがあるからなのでしょう。

(『仏教が生んだ日本語』大谷大学編を抜粋編集)

(九条武子の詩)

見ずや君 あすは散りなむ 花だにも

力の限り ひと時を咲く

いだかれて ありとも知らず おろかにも

われ反抗す 大いなるみ手に

おほいなるもの のちからにひかれゆく

わがあしあとの おぼっかなしや

